

日本語教師の文法観

- 中国語母語話者教師と日本語母語話者教師へのアンケート調査から -

小野 正樹

要 旨

中国国内で日本語教育に従事している人を対象に、文法観についてアンケート調査を行った。初めに、文法が外国語教育で大切かと質問したところ、〔A〕教授者としても、学習者としても文法が大切だと強く考える。〔B〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとやや考える。〔C〕教授者としての方が、学習者としてよりも文法が大切だと考える。〔D〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとは考えない、といった4種類に分類ができた。また、初級・中級・上級文法の区別があるかという質問に対しては、積極的に分ける意見、消極的に分ける意見、そして、区別はないとする否定意見に分かれた。学習文法として、「上級文法は日常的には使わない」という中国語母語話者教師の意見があり、上級文法を再考するための貴重な指摘だと考えたい。

【キーワード】学習文法 教育文法 日本語能力試験 BALLI

The Grammar View of Japanese Language Teachers: a survey of Chinese and Japanese native teachers

ONO Masaki

【Abstract】A survey on grammar view was carried out among teachers of Japanese language in China. We can divide their opinions into 4 groups: A) a strong positive opinion of classifying grammar into teacher's and learner's grammar, B) a weak positive opinion of classifying grammar into teacher's and learner's grammar, C) the opinion that teacher's grammar is more important than learner's grammar, and D) a negative opinion that there is no such distinction. The fact that Chinese native teachers of the Japanese language consider advanced grammar "not for daily use" is an important key for redefining advanced grammar.

【Keywords】learning grammar, teaching grammar, Japanese Language Proficiency Test, BALLI

1. はじめに

「上級文法」とは何か。初級文法・中級文法・上級文法という区別は成り立つのか。仮にこうした区別があるとしたら、何のために、そして、誰のために分けられていて、この3レベルの関係はどう捉えればいいのか。本研究では日本語教師自身が上級文法をどのように捉えているかを、教授者の視点(教育文法)と学習者の視点(学習文法)から尋ねた。調査対象は中国内の高校、大学で日本語教育に従事している日本語母語話者日本語教師(JT)と非母語話者である中国人日本語教師(CT)である。回答を計量的にデータ処理した先行研究によると、文法観は個人により意見の分かれることが指摘されているため、本研究では統計的手法を用いず、質的にデータを分析する手法をとる。

2. 先行研究

CTの文法観の調査を行った先行研究として、岡崎(2001,2005)と久保田(2005)がある。両者はいずれも Horwitz(1987)を基にした橋本(1993)の調査票を基本として、アンケートを行ったものである。これは、BALLI(Beliefs About Language Learning Inventories)に基づくもので、(1)言語学習に対する適性、(2)言語学習の難易度、(3)言語学習の性質、(4)コミュニケーション・ストラテジー、(5)言語学習の動機を調査するものである。橋本(同)では、日本語予備教育で学ぶ初級学習者(23か国、50名)を対象に、(3)言語学習の性質として、「外国語学習で一番大切なのは文法の学習だ」について、質問を行っている。その調査には中国人学習者は含まれていないが、「外国語学習で一番大切なものは語彙だ」と共に、「賛成」と「反対」に回答が大きく分かれていると指摘している。

岡崎(2001)はJTとCTを対象に、日本語・外国語の困難さに関する認識、中国人学習者に対する期待度、各言語機能に関する難易判定、外国語学習に対する姿勢等について、68項目からなるアンケート調査を行っている。また、岡崎(2005)で、詳細な記述はないが、「外国語学習で一番大切なのは文法の学習だ」という質問に対し、JTとCTでは回答に有意差があるとしている。日本語が母語か否かで回答が分かれることは、教育文法か、学習文法かの視点で、考え方が異なるからであろう。

日本、中国という2か国にとどまらず、広地域の調査を試みたものが久保田(2005)である。久保田では、非母語話者日本語教師を8地域に分け、学習教授内容や教授方法についてのアンケート調査を行っている。8地域とはロシア・東欧、南アジア、東南アジア、東アジア、中南米、大洋州、西欧、北米で、42か国の初等教育12名、中等教育139名、高等教育99名、一般教育59名の計309名を対象としている。調査項目については、教師の役割、学習教授内容、学習・教授方法、言語観、動機に分けており、その中で、「外国語学習の中で一番大切なのは文法の学習だ」という項目があり、「強く賛成」と「賛成」を合わせた回答を多い地域順に並べている(括弧内の数字はパーセント)。

ロシア・東欧(86.8) > 南アジア(73.7) > 東南アジア(56.8) >
西欧(56.3) > 中南米(31) > 大洋州(29.2) > 東アジア(28)

また、「日本語学習の中で一番大切なのは文法だ」という項目を、8カ国の中等教育担当教員にも行っている。2カ国は参考資料として加えられており、計10地域の調査である。10の地域とは、ロシア、インドネシア、タイ、マレーシア、米国、ニュージーランド、オーストラリア、韓国、中国、台湾である。

ロシア(78.6) > インドネシア(63.7) > マレーシア(51.7) > ニュージーランド(50) >
台湾(36.8) > オーストラリア(25) > 米国(23.8) > 中国(13.3) > 韓国(0)

分析結果では、「ロシア、インドネシア、マレーシアは文法指向性が高く、タイ、米国、ニュージーランド、オーストラリアは『賛成』と『反対』に2極化して」、「韓国は『どちらでもない』が半数以上を占め、賛成よりの回答はなかった」と述べている。反対に、CTは文法に対する指向性が低くなっていると報告している。CTにこうした傾向が見られることは、個人的にはやや意外な印象があるが、CTが文法をどのようなものとして考えているかを、本稿では探りたい。

3. 調査について

3.1 調査内容について

本調査では、文法観について、母語か否かによる違い、教授者と学習者の立場で文法観が変わるかを見るため⁽¹⁾に、以下の4項目を尋ねた。

質問内容

- 1 学習者として「文法は外国語学習で一番大切だ」という考えについて、どう思いますか。
 - 2 教授者として「文法は外国語学習で一番大切だ」という考えについて、どう思いますか。
 - 3 皆様が外国語を勉強なさった際に、あるいは勉強なさっている際に、初級文法・中級文法・上級文法という区別は存在した、あるいは存在すると思いますか。あるとしたら、どのようなものでしょうか。
 - 4 皆様が日本語を教えている際に、初級文法・中級文法・上級文法という区別は存在すると思いますか。あるとしたら、どのようなものでしょうか。
-

3.2 調査方法について

アンケート方法は、日本語で自由に記入するように依頼し、電子メールあるいはプリントアウトしたものを回収した。調査場所は中国吉林省長春市内、調査時期は2005年5月である。

また、CTの1名からは口頭で回答を得た。

3.3 インフォーマントについて

JT11名、CT5名から回答を得た。いずれも中国吉林省長春市内で日本語教育に従事している教師である。CTに日本語運用力の自己判断を求めたところ、いずれの教師も上級と判断している。また、JTにも外国語力を尋ねたところ、4名が上級レベルの外国語力(英語上級1名、中国語3名)を持っていると回答した。日本語教育歴は以下の通りである。(数字は人数)

<表1> インフォーマントの日本語教育歴

日本語教育歴	3年以下	5年以下	10年以下	10年以上
JT	4	1	3	3
CT	1	0	1	3

4. 「文法は外国語学習で一番大切だ」について

4.1 回答の概観

この質問に対する回答を概観すると、4通りの考え方が見られた。

<表2> 考え方の類型

〔A〕教授者としても、学習者としても文法が大切だと強く考える。
〔B〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとやや考える。
〔C〕教授者としての方が、学習者としてよりも文法が大切だと考える。
〔D〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとは考えない。

「A 教授者としても、学習者としても文法が大切だと強く考える」と分類するものは、回答から、否定的なコメントが読み取れないものである。「B 教授者としても、学習者としても文法が大切だとやや考える」とは、回答に同意はするが、文法の他にも大切なものがあると述べられているものである。「C 教授者としての方が、学習者としてよりも文法が大切だと考える」は、教授者と学習者としての立場で意識が大きく異なり、教育文法としての方が大切だと述べられているものである。そして、「D 教授者としても、学習者としても文法が大切だとは考えない」ものは、A、Bのような賛同する回答が見られないものである。

学習文法と教育文法では考え方が変わる回答もあり、「学習者としてのみ文法が大切だ」という学習文法を支持する回答はなかった。寄せられた回答を以下に具体的に見ていく。(「」内の表現は原文のままである。)

4.2 教授者としても、学習者としても文法が大切だと強く考える理由

〔1〕全面的に賛成する回答、〔2〕初級時には特に強く賛成する回答等が見られた。〔1〕としては、「外国語学習の骨格」(JT02)、「文法は外国語学習の基礎」(JT05)、「文法を勉強しないと、会話力や聴解力も伸びない」(JT08)、「文法は基本中の基本である」(CT05)といった強い肯定意見がある。〔2〕の初級を強調した回答としては、「特に初級では大切」(CT01)、「基礎を形成する初級段階では欠かせない」(JT09)、「文法の積み重ねがないと、中級・上級の学習に影響を及ぼす」(CT02)があり、また、個人の経験として、「英語を学習していた時に、(文法の時間が)多かったので大切だと思った」(JT02)という回答も見られた。

4.3 教授者としても、学習者としても文法が大切だとやや考える理由

この範疇では、「学習の目安にはなる」(JT01)という消極的賛成意見や、「初級の段階で、文法は大切だと思ったが、上級になるとそうは思わなくなった」(CT04)という、学習文法において変化する回答を得た。

4.4 教授者としての方が、学習者としてよりも文法が大切だと考える理由

学習文法と教育文法観で考え方が異なるもので、「文法第一という考えに拘束されて、時に非日常的な話し方をすることがある。」「日本語能力テスト対策では、どうしても文法指導に偏る」(JT07)、「学習目的が様々である以上、一番とは言えない。/教える側は文法を教えると、仕事をしたなぁと言う満足感を得られる気がする」(JT11)のように、教育現場を強く意識した回答を得た。

また、調査地域が、JTにとっては外国であり、JTでは中国語を意識した回答も得た。日本国内に比べて、中国語学習に強く関わっているからであろう。「(中国語の)サバイバルレベルの習得を目指す立場では、賛成できない。/文法を中心に会話、作文を展開しているので、大切だと考えます。」(JT03)、「中国語学習者としては、文法はそんなに大切ではない。(中略)発音の方が大事だ。/日本語では文法はかなり重要な地位を占めているような気がする。」(JT06) 語学教師であると同時に、外国語学習者であることを強く意識しているか否かで、回答が変わるように思われる。

4.5 教授者としても学習者としても文法が大切だとは考えない理由

理由は明記されていないが、「一番だとは思いません。」(JT10)と断言する回答の他に、「人によって学習の動機や目的は異なるものですし、それが異なれば自ずから学習方法や達成したいレベルも異なる。」(JT11)、「目的が様々である以上、一番大切なものなどないと思います。」(JT04)という、この質問設定自体に対する回答も見られた。

5. 「初級文法・中級文法・上級文法の分類は成り立つか」について

教育文法観について見ると、A) 積極的分類派、B) 消極的分類派、C) 否定派の3つに分けられる。積極的分類派と消極的分類派にはJTとCTがいたが、否定派のCTは今回の調査では見られなかった。学習文法観ではJTは3つに分かれたが、CTではA) 積極的分類派のみであった。

<表3> 初級文法・中級文法・上級文法の区別に関する考え方

	教育文法観	学習文法観
A) 積極的分類派	JT・CT	
B) 消極的分類派	JT・CT	JT
C) 否定派	JT	

5.1 積極的分類意見

積極的分類意見とは、文法を初級から上級に分けられると考える回答である。(以下、コメントは原文のままである。)

- (1) 「日本語は、表現したいことを最低限できるレベルという意味で初級が設定されているのではないかと思います。他の表現でも言い換えられるけど、より使い方が文語的だったり、特定のだったりするものが中級、上級となっていると思います。」(JT11)
- (2) 「初級は助詞、自他動詞、副詞等。中上級は会話的だけでなく、文章の表現、言葉の使い方(意味)等。慣用表現、また類似表現の使い分け等のように思います。」(CT01)

両者は、教育文法観とも学習文法観とも理解できるが、(1)は機能的分類であり、(2)は形式的分類と言えよう。

5.2 消極的分類意見

消極的分類意見とは、特に明確な基準を自分自身には持っておらず、他の分類基準に依存するものである。

- (3) 「検定による区分があると思います。3級文法、2級文法、1級文法は初級、中級、上級に対応すると思います。」(JT11)
- (4) 「教材作成、試験、教授上の都合で区別されているもので、言語に付随して存在するものではない。」(JT01)

(5)「教科書に初級と書いてあれば、初級なのであろう。中級、上級も同じ。」(CT05)
教材、検定試験のため、あるいは、その結果を根拠にするもので、教育文法としての意見である。CTの場合には、自分自身の基準ではなく、他の基準に従うという受け身の立場があるようである。

また JT の学習文法観のコメントである。

(6)「中国語学習の場合は「初級」「中級」くらいまでの区別をうっすら意識していました。というのも使用した「テキスト」に「初級」「中級」の文字があったからです。」(JT09)

5.3 否定意見

否定派とは文法自体は初級・中級・上級に分けられないと考えるものである。今回の調査では CT には見られなかった。

(7)「存在するとは思いません。」(JT10)

(8)「学習の目安として便宜的に区分されていると感じます。」(JT08)

また、学習者としての経験の回答を数名の JT から得ている。

(9)「英語では、中学校用・高校用・大学用といった便宜的な分類がありました。今から思うと、どういう基準で分けていたのかは謎です。」(JT11)

(10)「文法の難易度はあるにしても、初級・中級・上級ということばを使った経験は思い出せません。」(JT07)

義務教育あるいは必須科目としての学校教育を意識した回答である。

それに対して、自らが進んで学んだ場合に、学習言語により文法観が異なることも予想される。(11)は(6)と同じインフォーマントだが、学習言語により文法観が変わっている。

(11)「ドイツ語学習の場合は(中略)私にとっての「初級」と「中級」の区別は「文法」自体に等級の別によるものではなく、一文ずつ「文型学習」する方法からある程度のまとまった文章への「読解学習」へ移行する点にありました。」(JT09)

(12)「(中国に)留学していたときの文法もあまり覚えていませんし、実際に勉強した文法や文型を中国人が使っているところを聞いたことがあまりありません。」(JT06)

外国語教育を見ると、フランス語教育、スペイン語教育で「上級文法」という用語が見つかったが、接続法など文法項目を初級から上級に分けたものである⁽²⁾。

6. まとめ

今回の調査では、文法が大切だと考える回答以外に、1) 初級レベルでの文法が大切だとする回答、2) 文法がそれほど大切ではないとする回答、3) 教育文法としての方が、学習文法よりも大切だとする回答が見られた。この3つの回答は、初級以後の文法項目に対する否定的見方だと考えられる。そして、次の回答を紹介したい。

(13)「私が日本語を勉強していた時、ただ文型の複雑さによって分けられている感じだったが、簡単でよく使うのは初級で、複雑であまり使わないのは上級文法という感じだった。」(CT04)

なぜ「複雑さによって分けられている」と感じられたのかを考えると、現在の上級文法クラスは、次の方向でなされることが多いためであろう。

〔方向性 1〕 初級文法項目の多様化

例えば、初級で受身の形は教えるが、より多くの用法を上級で提示するものである。

〔方向性 2〕 初級文法項目の複合化

例えば、使役と受身が連続する使役受身や、使役に授受表現が連結するものである。

しかし、こうした教育は教師の視点の教育文法の要素が強すぎ、必要以上に複雑になっているためではないだろうか。

一方、教育現場からは次のようなコメントが聞こえる。

〔課題 1〕 各文法項目は理解していても、文法項目が連続すると理解不能に陥る学習者もいる。

〔課題 2〕 上級レベルでも語彙力が弱く、文法項目理解の妨げになっている学習者もいる。

文法が重要だと考える回答は強いものだから、解決すべきは学習文法の内容であろう。上記の〔課題〕を乗り越えるための教育文法ではない、日本語学習の上級学習文法の開発が必要だと考える。

謝 辞

中国吉林省東北師範大学赴日予備学校、および中国長春日本語教師の会にはアンケート調査に当たり、協力を得ました。改めて御礼申し上げます。

注

(1)木田(2004)では、学習文法概念を、「学習者と文法との関わり」と「教師と文法との関わり」があるとし、学習者の文法(本稿では学習文法とする)と教師文法(本稿では教育文法とする)に分け、前者として、文法自体の学習行為、文法知識、文法知識の活用の 3 点を挙げ、後者として文法の明示的知識、文法指導の 2 点を挙げている。

(2)日本スペイン語センターの HP<http://www.centro-espanol.jp/es_g_g_.html>にも見られる。

参考文献

- 岡崎智己(2001)「母語話者教師と非母語話者教師の BELIEFS 比較」、『日本語教育』110号、日本語教育学会：110-119
- (2005)「香港における日本語教師像 - 母語話者教師と非母語話者教師の BELIEFS 比較を通じて - 」、『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』、香港日本語教育研究会・香港城市大学語文学部・向日葵出版社
- 小野正樹(2005)「上級学習者への認知文法の可能性と課題」、『日本語教育論集』20号、筑波大学留学生センター：57-66
- 木田真理(2004)「外国人日本語教師における文法授業のあり方 - 文法シラバス整備に向けて - 」、『日本語国際センター紀要』第14号、国際交流基金：51-88
- 久保田美子(2005)「非母語話者日本語教師のピリーフの傾向について - 教授内容、教授方法、教材に関する確信を中心に - 」、『二〇〇五年日語教學國際會議論文集』、東吳大學日本語文學系 中華民國：87-96
- 橋本洋二(1993)「言語学習についての BELIEFE 把握の試み」、『日本語教育論集』8号、筑波大学留学生センター：215-241
- 横山紀子(2005)「第2言語教育における教師教育研究の概要 - 非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて - 」、『日本語教育紀要』第1号、国際交流基金：1-19
- Horwitz, E.K.(1987) 'Surveying student's Beliefs about 'language learning' in Rubin,J.& Wenden, A.(eds.)(1987) *Learner Strategies in Language Learning*, Prentice-Hakk International